



# 夜空を焦がす 花火の下で

辺りが暗くなり始めると、小長井区の河川敷沿いにある広場「つつみ遊園地」には続々と人が集まってきました。そして午後6時半過ぎ、赤石太鼓の演奏が「夜の余興」の始まりを告げます。

会場前方に設けられた特設ステージでは、区民を中心とした出演団体によって、ダンスや輪踊りなど演芸13演目が次々と披露されました。この日のために練習してきた芸の数々に会場が沸きました。

演目の合間には、小気味良いい口上に続き、打ち上げ花火が夜空を焦がします。あまりの迫力に泣き出す子どももいるほどでした。

久しぶりの再会を喜ぶ人たちや、のんびりと夕涼みを楽しむ家族連れ。思い思いに過ごす姿が、会場をにぎやかに彩りました。

1. 智者の丘公園から撮影した打ち上げ花火。/ 2. 奥大井煙火保存会の豪快な手筒花火に赤石太鼓の演奏が花を添えた。/ 3. 小長井区のサロン参加者によるダンス。軽快なトークでも湧かせた。/ 4. オリナ川根によるフラダンスの披露。/ 5. 最後のスターマインに、名残惜しそうに足を止める来場者。/ 6. 祭の余韻の残る帰り道。



## 「祭」と向き合う



住民自らが考えていく  
「祭の形」

徳谷神社祭典実行委員長  
山下 喜隆さん

活気あふれる祭の様子に喜びを感じる一方で、  
活少子高齢化・過疎化が進む中、今後、祭を続けていくことへの不安や難しさも感じています。だからといって祭そのものの開催を諦めるのではなく、自分たちにとって祭が過度の負担とならず、またそれぞれの形で無理なく参加できるような「心から楽しめる祭」の形を、住民みんなで考えていくことが大切だと思います。祭の存在が、住民にとって日々の活力の一部となり「よりどころ」であり続けることが一番です。

一緒に担ぐことで  
生まれる連帯感

徳谷神社神輿保存会会長  
井口 晶彦さん



神輿の担ぎ手として、氏子以外にも、他地区に住んでいたり町外に転出している若者を積極的に勧誘しました。そのこともあって、近年に多く多くの担ぎ手が集まりました。何よりも、誘った若者たちが「参加して良かった、楽しかった」と口を揃えて言ってくれたことがうれしかったですね。祭だけでなく、地域行事への参加については世代によって温度差があるのが現状ですが、一緒に神輿を担いだことをきっかけに、これからみんなでひとつの輪となっていけたらと思います。



2

5

6

5

4